

自然種アプローチは哲学から直観を駆逐できるか

Hilary Kornblith の認識論再訪

Eliminating intuitions with the natural kind approach?

Revisiting Hilary Kornblith's epistemology

下道亮成

### Abstract

Recent developments in experimental philosophy and metaphilosophy have raised concerns about the reliability of philosophical intuitions. In response, alternative methods that purportedly avoid reliance on intuitions have been proposed. One such method is “the natural kind approach,” as advocated by Kornblith (2002), which treats the subject matter of philosophy as natural kinds rather than as concepts. This paper evaluates whether the natural kind approach in fact avoids reliance on intuitions and argues that it remains doubtful. The Kornblithian demonstration of the natural kind approach depends on a contested epistemological view, the justification of which seems to inevitably involve appeal to intuitions.

### (1) 研究テーマ

近年、哲学的直観の証拠としての信頼性に疑問を投げかける議論が提起されてきた。この潮流を踏まえ、直観への依拠を伴わない手法が注目を集めている。Hilary Kornblith によって提唱された「自然種アプローチ」も、近年期待が寄せられている手法の一つだ。本稿では、自然種アプローチが実際に直観への依拠を避けることができるかを検討し、それが難しいと結論する。

### (2) 研究の背景・先行研究

#### 2.1 なぜ自然種アプローチが期待を集めるのか

哲学者が論証の証拠として直観を用いている、という見方は、メタ哲学ではしばしば標準的とされる (cf. Cappelen 2012: 1-3)。この見方によると、ある理論がそれに関連する直観と齟齬をきたす場

合、その理論は不利な立場に置かれ、逆にその理論が直観と整合的である場合、そのことはその理論を支持する一応の証拠となる。

しかし、直観の証拠としての信頼性には多くの論者から疑問が投げかけられている。批判のなかでもとりわけ有名なのが、人々の直観が哲学に無関係な要因（人口統計学的属性など）に左右されることを心理学などの手法を用いて示してきたとされる、実験哲学という一派によるものだ（e.g., Weinberg et al. 2001）。仮に実験哲学者の主張が正しいならば、多くの哲学者は自身が頼ってきた証拠が実は信頼できないものだったという悲劇に見舞われることになる。

もちろん、この種の批判に対し、真っ向から直観の信頼性を擁護するという戦略もある。しかし、そもそも直観に頼ることのない手法を採用することができれば、目下の問題は解決できるはずだ。こうした期待から一部の論者によって検討されている手法が、

Kornblith (2002) によって提唱されたものである（e.g., Alexander and Weinberg 2007: 73-74; Weinberg et al. 2012: sec. 4.1）<sup>(1)</sup>。以下で見るようにこの手法は「自然種」という形而上学のアイデアに訴えるものであるため、本論ではこれを「自然種アプローチ」と呼ぶこととする。

しかし、自然種アプローチは本当に直観の使用を駆逐できるのだろうか。この問いに答えるため、本論ではこのアプローチを認識論に応用している例として Kornblith 自身の自然主義的認識論を取り上げ、これが直観に依拠しているかを検討することとしたい。

Kornblith の認識論が自然種アプローチの正当化を意図したものであること（2002: 28）、そしてこのアプローチを用いたおそらく唯一の例であることを踏まえれば、彼の提唱する認識論の成否が自然種アプローチ自体の評価にも大きく影響すると言えるはずだ。

ここで、本論で用いる「直観」という語の意味を明確にしておこう。直観の特徴づけに関しては、哲学者の間で多種多様な見解が存在する（cf. Pust 2024: sec.1）。しかし、本稿は稲荷森（2024: 86）にならい、「直観」の意味を大まかに「ある命題の真偽に関する意識的推論によらない判断」、およびそれに類する信念とする。実験哲学者をはじめ、直観の信頼性を論じる論者の多くはこの特徴づけに同意するだろう。また、Kornblith 自身は直観がアポステリオリであることなどを主張するものの、彼の特徴づけが本論のそれと対立することはないはずだ（cf. Kornblith 2002: 13-14）。

## 2.2 Kornblith の自然主義的認識論

Kornblith によれば、多くの哲学者は自分たちが特定の対象 (e.g., 自由) についての概念を探究していると考えている。そして事情は認識論でも同様である。認識論者は、自分たちが〈知識〉の概念を調査していると考えているのである (2002: 9-10)。

しかし、Kornblith によると認識論者は〈知識〉概念の探究に従事すべきではない。なぜなら、概念とは対象についての我々の日常的な理解にすぎず、探究に値しないものだからである。代わりに彼が提案するのは、対象そのもの、つまり知識自体を直接、自然科学と同様の手法で調べることである (2002: chap.1)

それでは、知識なる現象それ自体の科学的探究とはどのようになされるのだろうか。「概念ではなく現象を見よ」と言われても、知識は塩酸やキリンのように知覚可能な対象ではない。このような疑問に対し、Kornblith は知識についての経験的研究を参照せよと答える。なかでも彼が目にするのが、非ヒト動物の認知を研究する認知行動学である (Kornblith 2002: 28)。

認知行動学においては、なぜある動物種の成員が環境に上手く対応できるほどの認知能力を身につけたのか、ということを説明する際に知識というカテゴリが持ち出される。たとえば、フエコドリという渡り鳥の一種はあたかも怪我をしたかのように振る舞い、注意を引くことで、外敵を自身の巣から遠ざける習性を持っている。なぜこの鳥が上手く外敵に対処できているかの説明は進化論的になされるが、その説明は、単にこの渡り鳥の認知能力が外界についての信念を生み出すこと以上に、その能力が安定して外界についての真なる信念を生み出せるということに訴える必要がある。そしてこのような信頼性の高い認知能力によって生み出された真なる信念は、知識の名にふさわしいと言えるだろう。こうして、認知行動学者は非ヒト動物に知識を帰属するのである (Kornblith 2002: chap.2)。

さらに Kornblith によれば、認知行動学が活用する知識というカテゴリは自然種でもある (Kornblith 2002: 61-62)。有力な理論である恒常的性質群説によれば、自然種とは外的条件の変化に耐えうる安定した性質のまとまり (恒常的性質群) を持つものである。そのおかげで、我々はその種に属する個体が持つ性質を因果的に説明

したり、予測したりできるようになるのだ。前段落で知識は認知行動学者が動物種の認知能力を説明する際に必要不可欠なものであるとされたが、Kornblithの診断では、知識がこの重要な役割を果たすのはそれが自然種だからなのである（cf. Horvath 2016: 170）

(2)。

自然種アプローチを採る Kornblith の認識論は、これまでの標準的な認識論とは一線を画するものだ。彼によれば、既存の認識論者たちは、主に哲学的事例についての我々の直観を証拠として知識の定式化を目指してきた。しかし、Kornblith の認識論においては、少なくともその主要な証拠は素朴な直観ではなく認知行動学の理論に基づく科学的な証拠である。こうすれば、〈知識〉概念ではなく知識の現象、すなわちここでは自然種を探究していることになるというのが彼の考えなのである。

### (3) 筆者の主張

それでは、自然種アプローチを実演してみせた Kornblith の認識論は、直観抜き哲学という目標を達成できているのだろうか。筆者の見立てでは、その答えは否である。知識が自然種であると論じる際に Kornblith は特定の認識論的見解を前提としており、その見解を擁護する際に直観を密輸入するほかないように思われるのだ。

まず着目すべきは、Kornblith の認識論が非ヒト動物の知識をその対象としているという点だ。先に見たように、彼の認識論においては知識という自然種は認知行動学において発見されるものとされる。そして認知行動学は非ヒト動物の認知を探究する学問領域であるから、当然そこで研究対象となる知識も非ヒト動物の知識だろう。他方、認識論の対象は基本的にはヒトの知識である。つまり、認識論の対象が認知行動学者の研究する知識であると主張する際に、Kornblith はヒトの知識と非ヒト動物の知識が同一種であると前提していることになるのだ。

しかし、この主張は認識論において容易に反発を招く。というのも、この分野の大きな論争である正当化の内在主義・外在主義論争において前者の陣営、特にアクセス内在主義と呼ばれる陣営に属する論者の少なくともほとんどは、非ヒト動物とヒトが同じ種の知識を持つとは考えないからだ。アクセス内在主義（以下、単に「内在主義」）とは、大まかに言えば、ある主体 S が持つ信念の正当化

は、Sの内観によってアクセス可能な範囲からのみ得られるというものである。そしてこの種の正当化を得るためには、ヒトしか持たない高次の認知能力が必要とされる。これを根拠とし、内在主義者は動物に知識を帰属しないのである。したがって、非ヒト動物がヒトと同種の知識を持つという立場を前提とする Kornblith の認識論は、内在主義者には到底受け入れられないものなのだ<sup>(3)</sup>。

もしかすると Kornblith やその支持者は、知識の自然種アプローチを進めるうえで内在主義という選択肢をあらかじめ排除しても問題ないと答えるかもしれない。しかし、このような戦略は目下の関心に照らしてあまり有望ではない。本論冒頭で述べたように、自然種アプローチは直観への信頼性の危機を回避したいという方法論的ニーズに基づいて近年注目されているのだった。このアプローチが哲学者にとって既存の手法から乗り換えやすいものであるためには、自然種アプローチが依拠する一階の理論はある程度説得的であるのが望ましい。したがって、自然種アプローチが認識論への応用において正当化の外在主義に依拠せざるをえないとすると、このアプローチの支持者は外在主義のもっともらしさを示すべきである。

そして、Kornblith 自身この要求に応える必要があることを自覚している。非ヒト動物の知識とヒトの知識が同一種である、という多くの内在主義者にとって受け入れ難い主張に説得力を持たせるため、彼は内在主義がもっともらしくないことを論証しているのである (Kornblith 2002: chap.4)。

しかし、これから示すように内在主義を批判する論証のうちで Kornblith は直観に基づく証拠を提示しており、また直観に訴えることなくこの論証を済ますことはできそうにない。彼の自然主義認識論が自然種アプローチを応用したおそらく唯一の議論であることを踏まえれば、筆者の批判の対象は Kornblith の自然主義的認識論に留まらず、自然種アプローチ一般にまで及ぶことになる。

まずは、Kornblith の内在主義批判を概観しよう。彼は代表的な内在主義者である Laurence Bonjour の立場を批判する際、次のように論証する (Kornblith 2002: 123-132)。Bonjour (1985) によれば、ある信念 B がある主体 S にとって正当化されているためには

- (1) B が S の持つ信念体系と整合的な関係にあること、そして
- (2) それらが整合的だという事実が S の内観によってアクセス可能であることの二つの条件が満たされる必要がある。Kornblith 曰

く、後者の条件が意味するのは我々の信念が正当化されるためには自分の信念体系全体を把握する必要があるということだが、これは人間には到底不可能である。したがって、この条件を採用するならば、「主体が実際に何かを知っている、という我々の日常的判断すべてが誤っている」ということになってしまう（Kornblith 2002: 133）。そして、彼はこのような帰結はもっともらしくないとして BonJour の主張を退ける。

この論証において、Kornblith は直観に訴えている。BonJour の理論を批判する際に彼が依拠しているのは、知識を帰属する我々の判断すべてが誤っているはずはない、という強固な直観だからである。BonJour の議論が失敗しているのは、それがこの直観と一致しないからなのだ。この意味で、Kornblith の認識論は直観に依拠していると言える。

ここで、このことは彼の認識論自体の欠陥を示していない、という応答がありうる。Kornblith は直観に依拠した論証を提示してしまっただが、それ以外の方法で内在主義を批判することは可能だ、というわけだ。しかし、このように応答するには、直観に依拠しない論証がどのようなものかを示す必要がある。というのも、正当化についての直観に訴えることなく内在主義を批判する筋道は極めて不明瞭だからである。上で取り上げた BonJour の立場を例として再び取り上げよう。BonJour による正当化の内在主義を批判するためには、どのような戦略が考えられるだろうか。一つには、典型的な正当化された信念を一つ持ち出し、それをこの立場が説明できないと主張することだろう。しかし、ある信念を「典型的な正当化された信念」として提示する際に、正当化についての我々の直観を用いずに済むかは疑わしい。直観とは独立の知覚的証拠だけではこの戦略にとって不十分なのである。したがって、Kornblith の認識論を擁護するためには、少なくとも直観を証拠として用いない内在主義批判の方針を素描する必要があると言えるだろう(4)。

以上の議論をまとめよう。本論の狙いは、自然種アプローチが直観に頼らず遂行可能かを Kornblith の認識論を精査することによって検討することにあつた。彼は知識の自然種は認知行動学において発見されるとしたが、この主張は正当化の外在主義に基づいていた。そして内在主義を批判するうえで Kornblith は直観に訴えており、また直観に訴えない戦略を採ることも困難であることが分かっ

た。この議論が正しければ、Kornblith の認識論は自然種アプローチ一般の妥当性を示す議論としては問題含みであると言えるはずだ。さらにこのことは、自然種アプローチが原理的に直観への依拠を必要としないという主張に留保をつけるものである。

#### (4) 今後の展望

本論は、自然種アプローチが直観に依拠せず遂行されうる、という見立てに疑義を呈するものであった。しかし、直観抜きに遂行されえないならばこのアプローチは放棄されるべき、という想定には筆者は与しない。というのも、直観の信頼性を疑う根拠に応じて自然種アプローチの持つ妥当性は変わるからである。

たとえば実験哲学の成果を根拠に直観の信頼性を疑う論者は、Kornblith の直観への依拠は問題含みでないと主張するかもしれない。実験哲学がその信頼性に疑いを向けてきた直観は、主に哲学者が議論のために作成した思考実験によって惹起されるものだからである。そしてこの問題は、もしかすると直観一般の特徴ではなく、思考実験が持つ突飛さに由来しているのかもしれない。この診断が正しければ、本論で取り上げた例において Kornblith が訴えていたのは思考実験への直観的判断ではなく日常的な直観なのだから、その信頼性を疑う根拠はないと論じることにも可能である。よって、自然種アプローチが有効な手法かは、最終的には直観へ向けられる批判自体の妥当性に左右されるだろう。

また、直観的証拠なしに内在主義を正当化できそうにないという本論の主張が決定的ではない、という点も重要である。この主張への反論がありうるかは、さらに検討される必要がある。

#### 注

- (1) なお、Kornblith 自身は自然種アプローチが直観を全く必要としないものとは考えていない (cf. Kornblith 2005: 430)。しかし、本文で参照したように自然種アプローチが「直観抜きの哲学」を可能にすると述べる文献は複数存在しており、本論は彼らの見立てのもっともらしさを検討するものである。
- (2) この自然種理解への批判は Horvath (2016) を参照せよ。

- (3) 詳細は異なるものの、Kornblith に対する同様の指摘は Bryson and Alexander (2012: 167-168) も行っている。
- (4) Nado (2016: 793) は哲学的信念を正当化する証拠に直観以外のものがありそうにないと論じるが、本論の主張はこれより弱い。

#### (5) 参考文献

- 稲荷森輝一 (2024). 「哲学者の直観は素人の直観より信頼できるのか」. 『哲学』, 75: 84-101.
- Alexander, J. and Weinberg, J. M. (2007). Analytic epistemology and experimental philosophy. *Philosophy Compass*, 2: 56-80.
- BonJour, L. (1985). *The structure of empirical knowledge*. Harvard University Press.
- Bryson, A. and Alexander, D. (2012). The view from the armchair. *Essays in Philosophy*, 13 (1): 162-182.
- Cappelen, H. (2012). *Philosophy without intuitions*. Oxford University Press.
- Horvath, J. (2016). Conceptual analysis and natural kinds: the case of knowledge. *Synthese*, 193 (1): 167-184.
- Kornblith, H. (2002). *Knowledge and its place in nature*. Oxford University Press.
- Kornblith, H. (2005). Replies to Alvin Goldman, Martin Kusch and William Talbott. *Philosophy and Phenomenological Research*, 71 (2): 427-441.
- Nado, J. (2016). The intuition deniers. *Philosophical Studies*, 173 (3): 781-800.
- Pust, J. (2024). Intuition. In E. N. Zalta and U. Nodelman (Eds.), *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Fall 2024 Ed.).  
<<https://plato.stanford.edu/archives/fall2024/entries/intuition/>>.
- Weinberg, J. M., Nichols, S. and Stich, S. (2001). Normativity and epistemic intuitions. *Philosophical Topics*, 29 (1-2): 429-460.

Weinberg, J. M., Crowley, S., Gonnerman, C., Vandewalker, I.,  
and Swain, S. (2012). Intuition & calibration. *Essays in  
Philosophy*, 13(1): 257-284.

(一橋大学)